

# 北陸に伝わる蓮如上人伝承

No.	タイトル	内容	地域
1	白鹿の道案内	京から吉崎に向かわれた蓮如上人御一行が道に迷われた。その時一匹の大鹿が現れ、吉崎の御山へ導いた。御山に到着すると、鹿は消え、そこには白髪の老人が座っており、「ここに御坊をお建てなさい」と告げて消えた。鹿は鹿島明神の化身であったという。	福井県あわら市吉崎
2	白鹿の正体	上記鹿島明神の化身は、蓮如上人の4男蓮誓(れんせい)と言われている。蓮如上人がまだ近江にあった文明元年(1469)の春、吉崎の名主大家彦左衛門が大津顕証寺に向向いて、当時15歳の蓮誓を吉崎に伴い、吉崎の入江の孤島、鹿島の森に祀られている鹿島明神社の坊守という名目で吉崎に住ませたという。吉崎の入江に輝く鹿島明神社の明神燈が、人々を導く燈台の役割を果たしていたと考えられることから、蓮如上人を鹿島明神の白鹿が吉崎に導いたという伝承は、この蓮誓の坊守説から生まれた伝承とも考えられる。	福井県あわら市吉崎
3	シャシャムシャ踊り	蓮如上人がはじめて吉崎御山にのぼられたとき、生い茂った笹をかき分けかき分け登られた。そして、上人のお話を聞こうと、笹をかき分けながらやってきた門徒衆。その様子を表した踊りと囃し「シャシャムシャ踊り」が、吉崎周辺に伝わる。	福井県あわら市吉崎
4	お腰掛け石	蓮如上人が美しい吉崎の景色を楽しまれ、和歌などを詠まれた「お腰掛け石」ある夏のこと、何日も日照りが続き、村人たちは田んぼの水やりにも忙しく、蓮如上人のお話を聴きに行く暇もなかった。蓮如上人は心配され、お腰掛け石の近くにあって水受けの水をすくい、お念仏を称えながらその水を振りまくと、ポツリポツリと雨が降り出したという。お腰掛け石には蓮如上人の温もりが今も残り、大雪の時でも一番はじめに雪が解けると伝わる。	福井県あわら市吉崎
5	お花松	蓮如上人が、いつものように本堂でお勤めなさった後、ほとけ様のお花松を抜いた。お庭に出て、お花松を丁寧に挿し木し、お念仏を称えられ、お供の者に、「もし、この松が根付いたら、吉崎御坊が栄えること間違いなし」とおっしゃった。松は根付き、江戸末期まであったという。御山には初代の古株が残っており、その横に二代目の松がある。	福井県あわら市吉崎
6	片葉の葦	蓮如上人が吉崎を退出される夜、混乱を防ぐため、多くの門徒たちにわからぬよう、村人は七曲りの船着場の岸辺でお見送りしようと集まった。村人達は葦が生い茂る中、蓮如上人が乗る小舟に向かって手を合わせ、涙を流し、一目、蓮如上人の顔を拝みたいと背伸びすると、不思議にも、さらさらと葦の葉が片方に寄って、蓮如上人の顔をよく拝むことができるようになった。以来、吉崎湖畔の葦は片葉になったという。	福井県あわら市吉崎
7	吉崎こなご	不漁で困っている漁民を救うために、蓮如上人は小舟で北潟湖へ出られた。蓮如上人が紙のこよりをちぎって湖面に投げられると、そのこよりが白い小魚「こなご」となって繁殖し、豊漁となって漁民は喜んだ。これが「吉崎こなご」の由来である。	福井県あわら市吉崎
8	嫁感し肉付き面	姑は、信心篤い嫁が吉崎御坊に詣でるのを止めさせようと、鬼の面を付けて嫁をおどした。しかし、嫁は少しも動じず、かえって姑の顔に面が食い込んで離れなくなりました。姑は、嫁に連れられて蓮如上人の前で「南無阿弥陀仏」と称え、不思議や不思議、鬼の面は悪業の肉をつけて顔から離れたという。	福井県あわら市吉崎
9	お筆草	蓮如上人は、村人から南無阿弥陀仏の御名号を書いてほしいと頼まれた。上人は村人に筆を用意するよう所望したが、村には名号を書くような大きな筆がなく、村人が浜草の根を持ってきた。上人はそれを束ねて筆にし、見事な南無阿弥陀仏の御名号をお書きになった。以来、浜草を筆草と呼ぶようになったという。	福井県あわら市吉崎
10	草も生えない七曲り	吉崎浦の対岸、浜坂浦に別派の門徒で蓮如上人を嫌う老婆がいた。老婆は吉崎御坊に火をつけてやろうと決心し、文明6(1474)年3月28日、日の暮れるのを待って、火をつけた松明を頭に縛り付け、入り江を泳いで七曲り下の船着場に向かった。船着場から曲がりくねった七曲りの崖道を登りつめ、誰もいないのを見て、火をつけた。その後、老婆は急いで坂道を下り、泳いで浜坂に逃げ帰った。御山の方を見ると火の手が上がっている。老婆は手を打って喜んだ。以来、悪行をした老婆の通った七曲りの小道には、草木が生えなくなったという。	福井県あわら市吉崎
11	火消し蟹	吉崎御坊が火事になったところ、日頃蓮如上人を慕っていたカニたちが無数に集まってきて泡を吹いて、その泡で火を消し止めた。今も生息する吉崎のカニは、その時の火でハサミが赤く染まっているという。	福井県あわら市吉崎
12	血染めの御聖教	文明6(1474)年3月28日酉の刻、吉崎御坊南大門の多屋から出た火は折からの南風にあおられて、北大門、南大門、西大門へと燃え広がった。その時堂衆がかけつけて、村人らと共に、御本尊をはじめ大切な品々を選び出した。ところが蓮如上人が、書院の机の上に親鸞聖人御親筆の『教行信証』のうちの一冊を置き忘れたことに気付かれた。すると近くにいたお弟子の本光坊了願が、「その聖教を私が命に代えても取り出して参ります」と、人々の引き止めるのを振り切って火の中へ飛び込んだ。炎の中、ようやく書院にたどり着いて机の上の聖教を見つけたが、あたりは火の海であった。了願は聖教を燃やしてなるものか、と持っていた短刀で腹を一字に切り開き、聖教を腹の中に納め、うつぶせになって絶命した。翌朝火事の後始末をしていた堂衆が、黒こげになった了願の死体を見つけて蓮如上人に知らせた。抱き起こしてみると、腹の中から血染めの聖教が現れた。蓮如上人は仏法に命を捧げた了願を偲び、居並ぶ人々とともに合掌し、お念仏を称えられたという。	福井県あわら市吉崎
13	焼け残りの御名号	文明6(1474)年3月28日夕刻、吉崎御坊は大火事に見舞われた。この時の火災の中で、周りは焼けながらも御名号の文字だけは一字も焼けずに残ったという「焼け残りの御名号」が、本願寺眞無量院吉崎御坊に伝わっている。	福井県あわら市吉崎

14 石山観音の由来	幕末の頃、水上安全・家内幸福を願い、吉崎の岩崎地区にある岩室に観音様を安置することになったところ、船頭某の枕元に蓮如上人の母が立ち、それなら蓮如上人ゆかりの石山観音を、と言って立ち去った。同じ夢を見た者が何人も出てきたため、早速石屋を近江国石山寺へ行かせ、石山寺の観音様とそっくりの観音様を彫らせ、ご安置した。それからこの観音様は「蓮如上人の御母上様」の化身として信仰されている。	福井県あわら市吉崎
15 蓮如上人と梅	<p>① 蓮如上人の詠まれた「まきおきし一粒種に八房の実らば弥陀の誓いとぞ知れ」の歌のとおり、八房の梅になったという梅が、加賀市山中町菅谷徳性寺にある。徳性寺境内には、上人愛用の椿の杖で地を突いたところ、清水が湧き出たという「椿清水」もある。</p> <p>② 金沢市木越福千寺には、蓮如上人が挿した杖から五色の梅の花が咲いたという梅がある。</p> <p>③ 河北郡津幡町北横根には、蓮如上人のにぎり飯の梅干しの種から実がなったという梅がある。</p> <p>④ かほく市宇ノ気町大崎には、蓮如上人が梅の杖を地に挿したところ、一晩で枝が生じ、八重咲きの梅となったという梅がある。</p> <p>など</p>	<p>①石川県加賀市山中町</p> <p>②石川県金沢市木越町</p> <p>③石川県河北郡津幡町</p> <p>④石川県かほく市宇ノ気町など</p>
16 三宝鳥	河北郡津幡町北横根を蓮如上人が訪れた際、老梅にどこからともなく鳥がやってきて、「ブッポウソウ、ブッポウソウ(仏法僧＝三宝)」と鳴いたという。また、同じく北横根の乗光寺に上人が滞在中、中庭に霊鳥が飛んできて、「念仏・念法・念僧」と鳴いたという。	石川県河北郡津幡町
17 法力谷	河北郡津幡町笠池ヶ原の寺屋敷に蓮如上人の草庵があった。その寺屋敷と隣村の間には深い谷間があり、昔から村人たちは谷底までおりて渡っていたが、上人は法力を使って飛び越えたという。それでこの谷を「法力谷」という。	石川県河北郡津幡町
18 蓮如上人と大イチョウ	<p>① 河北郡津幡町笠池ヶ原の寺屋敷で蓮如上人が昼食後、使っていた箸を地面にさしたところ、1本は松に、もう1本は大イチョウに成長した。この大イチョウは西(西方浄土)側ばかりの枝が伸びるという。</p> <p>② 河北郡七塚町(現:かほく市七塚町)で蓮如上人が布教された際、専通寺の僧がお弟子となった。その専通寺の境内に蓮如上人はイチョウを植えたところ、大イチョウに成長した。昭和のはじめ、その寺が火事にあつた際、本堂前にあつた大イチョウが火の勢いをいとめたため、付近への延焼を免れた。人々はこの蓮如上人お手植えのイチョウを「火伏せのイチョウ」と呼び、大切にしているという。</p> <p>など</p>	<p>①石川県河北郡津幡町</p> <p>②石川県かほく市七塚町など</p>
19 蓮如上人と松	<p>① 蓮如上人が袈裟を掛けたという小松市大領町の「袈裟掛けの松(庚申松・盃松)」。この松が地に接するほどに成長した時は、一面泥海に化すとの伝承がある。</p> <p>② 蓮如上人が立ち寄った際に数珠と袈裟を掛けたという加賀市山代専光寺の「袈裟掛けの松」</p> <p>③ 蓮如上人が村人の頼みをきいて手植えた、松葉が一本という白山市平加町の「一本の松」(「蓮如の松」とも)</p> <p>など</p>	<p>①石川県小松市</p> <p>②石川県加賀市</p> <p>③石川県白山市平加町など</p>
20 御名号	<p>①<b>木槿(むくげ)の名号</b>…手取川そばで一泊された蓮如上人が村人に法話をなされた。出発の際、上人は傍らに生えていた木槿(むくげ)で御名号を書いたという。</p> <p>②<b>つぶら児の名号</b>…蓮如上人が二俣本泉寺に滞在中、つぶら(赤子を入れておく籠のようなもの)の中の赤ん坊が泣きだしたので、上人自ら御名号を麻がらで書いて枕元に置いてやったところ、赤子は泣きやんだという。</p> <p>③<b>藤蔓の名号</b>…蓮如上人が四十万(しじま)善性寺に滞在されていた際、藤蔓を石でつぶして筆代わりにして御名号を書いたという。</p> <p>④<b>アワビ貝の名号</b>…蓮如上人が船で宮腰(金沢市金石町)を訪れた時、同乗していた武士が、船についていたアワビをはがすと、貝の内側に六字の名号が現れた。武士は後に無量寺に寿福寺を開き、この貝を今も寺宝として伝える。</p> <p>⑤<b>川越の名号</b>…蓮如上人とお供の僧が、日が暮れて百姓の家に宿を頼んだが、出てきた女に断られた。仕方なく、上人たちはその家の軒下で一晩を明かした。翌朝、そとは知らないその家の主人が、軒下で読経している僧たちを見つけて恐縮した。蓮如上人は主人に自分が本願寺蓮如であることを明かし、「自分の行いを改め仏をたのめば仏になる」と説いて立ち去った。あまりの尊い姿に畏敬の念を抱き、主人は念仏を称えながら見送った。浅野川を渡った蓮如上人は、川向うの主人に向かい、手拭いを広げて持つように言った。蓮如上人が矢立の筆を取り出し「南無阿弥陀仏」と空中に書いたところ、不思議にも六字の御名号が手拭いに移った。「その名号を掲げ、弥陀のお救いを喜び、お念仏を称えなさい」と、上人は教えを授けて行ったという。</p> <p>⑥<b>鷹の羽の名号</b>…蓮如上人がお手植えされた一本松のそばで説法中、鷹が落とした羽で御名号を書いたという。</p> <p>など</p>	<p>①石川県能美市</p> <p>②石川県金沢市二俣町</p> <p>③石川県金沢市四十万町</p> <p>④石川県金沢市金石町</p> <p>⑤石川県金沢市卯辰山町</p> <p>⑥石川県白山市平加町など</p>

21	お腰掛け石	<p>蓮如上人が腰をかけて人々に仏法を説かれた、或いは休憩をされたという石が、「お腰掛け石」として各地に残っている。</p> <p>① 宝海寺 ② 善徳寺…近くの家の主人が、自分の家の前にあるこの石を邪魔に思い、よそへ動かしてしまった。すると、その妻が臨月になっても赤ん坊が生まれなくて苦しむということがあり、村の長老から石を動かしたことが原因ではないかと言われた。主人が慌てて石を元の位置に戻すと、妻は無事に出産したという。以来、妊婦がこの石をなでると安産になると言われ、「安産石」とも呼ばれている。</p> <p>③ 石川県加賀市上河崎町 など</p>	<p>① 石川県能美市 ② 富山県南砺市 ③ 石川県加賀市上河崎町など</p>
22	蓮如上人と水	<p>① 夏病みの薬水…蓮如上人が、加賀の南谷川(堂谷川)上流の崖に杖を突き立てて清水を湧き出させた。村人たちはこれを「夏病みの薬水」と呼び、飲んでいたという。</p> <p>② 蓮如水…蓮如上人が波佐谷(はさだに)松岡寺に滞在していた時、門徒であった彦右衛門宅の老婆に水を求めた。しかしこの家には井戸が無かったため、老婆はわざわざ隣家へ水を貰いに行き、上人に差し出した。喜んだ蓮如上人が、「この家にも井戸水がでるように」と三度地面を杖で突くと、たちまち水が湧き出したので、その井戸水は「蓮如水」と呼ばれるようになったという。</p> <p>③ 蓮如清水…文明5(1473)年、蓮如上人が加賀二保本泉寺から井波の瑞泉寺へ向かわれる途中、蓮如上人は腹痛になり、通りがかりの禅僧から薬を貰った。ところがあたりには薬を飲むための水がなく、蓮如上人は持っていた杖で地面をたたいた。すると、たちまち清らかな水がこんこんと湧き出してきたという。</p> <p>④ 蓮如墨水…文明年間、蓮如上人が加賀二保から飛騨白川へ行かれる途中、越中・五箇山の上平村桂集落に宿泊された。当時、桂集落の人々は川水を飲料水として使用していたが、折からの雨で川水が濁り、困っていた。蓮如上人が杖をついたところ、そこから清水がこんこんと湧き出るようになり、以来集落の人々はこの水を大切に使ったという。</p> <p>⑤ 杖の水…蓮如上人が布教で小倉畑(遠敷郡名田庄村)滞在中、村人が近くに水が無く困っていたのをみた上人は、外に出て、持っていた杖を地に突き挿したところ、こんこんと清水が湧き出たという。以来人々は「蓮如様 杖の水」と名付けてこの水を大切に使った。</p> <p>⑥ 蓮如清水…大聖寺川で米とぎをしている女に、蓮如上人が一杯の水を所望したが、女は米をといだ白い水を差し出した。上人は「川があっても飲み水が無いとは」と、持っていた杖を地面に挿すと、たちまち清水が噴き出した。村人たちは大層ありがたがり、清水を「蓮如清水」と呼んだという。</p> <p>⑦ 白水の井戸…⑥と同様の話が加賀市八日市にも伝わる。この水はどんなに炎天が続いても枯れることはなかったという。</p> <p>⑧ 蓮如上人せり清水…蓮如上人が、加賀の下谷で説法していた際、里の女房たちが苦勞して谷川から飲み水を汲み取ってくる姿を目にした。さっそく周辺を見て回り、水脈を探され、里人に掘るよう示した。里人が上人の示した場所を掘ってみると、たちまち清水が湧き出てきた。それ以来、里人たちは「この御恩を忘れまい」と、この水を「蓮如上人せり清水」あるいは「仏水」と呼んで大切に使ったという。</p> <p>など</p>	<p>① 石川県加賀市 ② 石川県小松市波佐谷町 ③ 富山県南砺市 ④ 富山県南砺市 ⑤ 福井県大飯郡おおい町 ⑥ 石川県加賀市上河崎町 ⑦ 石川県加賀市八日市町 ⑧ 石川県加賀市山中温泉など</p>
23	蓮如上人と木	<p>① 樺の木…蓮如上人が木ノ目谷村(金沢市蓮如町)を訪れた時、近くに住む一人の女性が病気で亡くなった。蓮如上人はこれを知り、「阿弥陀仏の本願があるから、女人の浄土往生も間違いない。この枝が根付かなければ、わたしの教えたことは嘘であろう」と言って、庭に樺(つが)の一枝を挿した。するとその言葉どおりに根付き、大木に成長したという。</p> <p>② カヤになった念珠玉…蓮如上人が曾谷(鶴来町)の道場で説法した際、一人の男が突然大声でみ教えをそしり始めた。すると、蓮如上人は自分の念珠の糸を切り、「この念珠の玉からカヤの木が生い茂ったならば、み教えは栄え、仏法をそしる悪人も極楽往生できるだろう」と言って、玉を庭に埋めた。すると、玉からは芽が出て大きなカヤの木に成長し、しかもその実はすべて念珠のように穴が開いていたという。現在、四十万(しじま)町の善性寺にあるのがその木とのことである。</p> <p>③ イブキ杉…宝徳元(1449)年、蓮如上人は巡錫の途中、能美村の刀鍛冶の家へ立ち寄った。刀鍛冶は法話を聞いて門徒となり、性賢という法名をいただいた。その後の文明3(1471)年、蓮如上人が加賀を巡錫中、性賢は上人を招き、村人を集めて法座を開いた時、蓮如上人が一本の杉の小枝を庭に挿すと、芽を出し成長したという。その葉がイブキに似ているので、人々は「イブキ杉」と呼んだ。</p> <p>④ 蓮如笹…蓮如上人が松岡寺を去る時、息子蓮綱(れんこう)と門信徒が見送る中、境内に笹をお手植えされた。笹は勢いよく育ち広がったが、その笹の葉は縁が真っ白で青いところが少ないという。門徒たちは今もこの笹を「蓮如笹」と名づけ大切にしている。</p> <p>⑤ 蓮如桜…蓮如上人が巡錫中、昼食をとろうとしたが、箸が無かったので、近くの山桜の枝を折り、箸の代わりにした。食後、上人はその箸を地に挿して立ち去ったところ、箸は根付いて桜の大木となり、いつしか「蓮如桜」と呼ばれるようになったという。</p> <p>など</p>	<p>① 石川県金沢市蓮如町 ② 石川県鶴来町 ③ 石川県小松市能美町 ④ 石川県白山市相滝町 ⑤ 石川県河北郡津幡町など</p>

24	波佐羅の蓮如上人お木像	むかし、猟を生業とする武士の男がいた。男は、残忍な殺生を重ね、蓮如上人の吉崎が繁盛するのを妬んでいた。ある時、この男の一人娘が病になり、高熱に苦しみながら「火の車が迎えに来る」と言って亡くなった。すると、にわか火の車が現れ、牛頭馬頭の怪物が「仏法をそしり、殺生をし、傲慢なお前を懲らしめに来た」と大声で叫んだ。火の車だけが見え、焼けるよう暑さの中、男は恐ろしさに震え、日ごろの行いを悔い、仏法の尊さに気付いた。すると、たちまち火の車は消えた。男はすぐさま吉崎の蓮如上人を訪ね、上人からみ教えを聞き、涙を流して、上人のお弟子になった。後に、上人が吉崎を退去されるとき、深く嘆いた男に、上人は自ら自分の木像を作って与えたという。	石川県小松市波佐羅町
25	医王山の仏	砂子坂の草庵に蓮如上人がいらしたとき、外から上人を呼ぶ声がした。出てみるとひげは伸び頭がぼさぼさの大男の老人がいた。老人は背中に背負っている大風呂敷を預かってほしいと頼むと消えた。その中には見事な木彫りの仏像があった。その老人は仏の化身であろう、と上人は村人に語った。	石川県金沢市砂子坂
26	タタラ場跡	砂子坂を去る前に蓮如上人は、高坂光徳寺の道乗を訪ね、世話になった礼をしたいとおっしゃった。道乗は、自分の家にある金塊でご本尊を鑄造してほしいとお願いした。上人は、村の上手で大きなタタラを作って鑄型をつくり、道乗の金塊から黄金の阿弥陀如来像をつくった。村人はその見事さに喜び、唄い踊ったという。その後、光徳寺が火災になり、村人たちが嘆いていると、黄金のご本尊は飛び出しており焼失を免れたという。	石川県金沢市砂子坂
27	髪切り山と石刷りの名号	蓮如上人が砂子坂の草庵で人々に教えを説いていると、その説法を聞いた武士が大変感動し、武士をやめて上人の弟子になりたいと申し出た。上人は村の上手で武士の髪を剃ったので、その場所を「髪切り山」と呼んだ。その後、上人が砂子坂を去る時、村人が泣いて別れを惜しんだところ、上人は足元の石に六字名号を書き、形見とするよう村人に渡した。この石は現在富山県城端町の善徳寺に保管されているという。	石川県金沢市砂子坂
28	難破を救った六字名号①	蓮如上人が、吉崎をお去りになることとなり、若狭小浜へ向けて船で出帆した。敦賀津沖を過ぎたあたりで、突然の嵐に遭い、船は木の葉のように縦横と大きく揺れ動き、船方衆は沈没を免れようと必死に立ち働いた。しかし風はますますひどくなり、船方衆は船上にひれ伏し無事を祈るばかりだった。蓮如上人はこの様子を見て、六字名号を御染筆された。それからその名号を海中に投げ入れ大声で念仏を称えた。お供の者と船方衆もそれにならって大声で念仏を称えた。すると不思議にも荒れ狂っていた嵐はびたりとおさまり、今までの風波はうそのように静まり、蓮如上人御一行は難破することなく、無事小浜に到着した。	福井県小浜市
29	難破を救った六字名号②（龍神香炉）	小浜滞在中のある夜、蓮如上人の枕元に龍神が現れ、「先日、海上に投げ込まれた六字の名号のおかげで、浄土に生まれる尊い仏縁を得ました。お礼に香炉を残しますので、祖師聖人（親鸞）さまの御仏前にお供え下さい」と告げ、姿を消した。上人が目覚めると、枕元に香炉が残されていた。人々はこの香炉を「龍神の香炉」と呼び、報恩講では宗祖聖人御影像ともども拝んだという。	福井県小浜市
30	ちまき笹	文明7(1475)年5月4日、蓮如上人が加賀・小松波佐谷の松岡寺から吉崎御坊へ帰る途中、動橋（いぶりばし）にさしかかったところで日が暮れてしまった。そこで、近くにあった枡屋小右衛門の家に一夜の宿を乞うたが、小右衛門の母は「たそがれ忙しい時に、いまいまい、早く出ていけ」と言った。その母が端午の節句の粽（ちまき）を作っているのを見た上人は、「せめてその粽（ちまき）を一本くれないか」と願ったが、小右衛門の母は、傍らにあった石を、ちまき笹に包んで上人に投げ与え、「それを食べれば一晩宿を貸してやろう」と言った。蓮如上人はあまりに邪険なこの母の心をあわれみ、「弥陀の本願に偽りなければ、この笹より再び青葉が生まれるだろう」とちまき用にゆでた笹を地に挿したところ、ゆで笹はたちどころに根をはり、青葉を生じた。小右衛門の母は、この不思議に驚きひれふし、先の非礼を悔い、息子の小右衛門と共に、上人のご勧化をいただき、親子ともどもお弟子となった。枡屋小右衛門は、「篠の道場」を開いて初代となり、お念佛のみ教えを広めた。	石川県加賀市動橋
31	芽が出てきた煎り豆	蓮如上人は二俣本泉寺への帰り道、日が暮れてしまったので卯辰山下の道場に立ち寄り、一夜の宿を頼んだ。出てきた老婆は「玄闍で寝なさい」と言い放ち、部屋に入ってしまった。老婆が眠りにつくと、夢の中に赤鬼、青鬼が現れ、自分を連れ去ろうとする。もがいて抵抗するが、鬼の力には勝てるわけもなく悲鳴を上げたところ、玄闍に泊めた蓮如上人が入ってきた。鬼たちは上人の顔を見ると、一目散に逃げ去った。悪夢から覚めた老婆が立ち上がり、玄闍をのぞくと、蓮如上人は柱に寄りかかって念仏を称えている。そのお姿に畏敬の念にかられ改心した老婆は、上人に手について無礼を詫言、家の中に案内し、囲炉裏のまわりに座してもらった。蓮如上人はお礼を言い、弥陀の本願の話をし、「弥陀を信じてお念仏を称えなさい」と勧めた。老婆は女人も救って下さる弥陀の本願を知って喜び、大豆を煎って上人たちにふるまった。蓮如上人は翌朝、「昨夜いただいた煎り豆の残りを畑にまいて下さい。弥陀の本願にうそいつわりがないならば、必ず芽が出るから」と言い残して出立した。早速老婆がその豆をまいたところ、芽が出たという。	石川県金沢市卯辰山町